
White

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

White

【Nコード】

N5378U

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

マイペースお嬢様Ⅱ喧嘩最強

腹黒執事Ⅱ変態彼氏 つてこんなのってあり??

「ふええ...零夜がいいのっ!!」

「柚鈴に触るなんて許しませんよ?」

こんな二人が金持ち不良校にやって来た!?

マイペースお嬢様の敵は全同学年女子の敵!!

二人がある暴走族に出会う・・・

華欄高校？どこそれ。

「ふえ．．．零夜あ．．．」

真つ暗な部屋。知らない部屋。

「どこお．．．」

「柚鈴ー．．．どうしたの？」

「ふええんつれーやあー!!」

現れた探し求めてた人。

「ここどこ．．．?」

「覚えてないの？華欄高校だよ。

全寮制だからここに住むの。僕も一緒に」

優しく抱きしめながら話すこの人．．．
橘零夜タチバナレイヤ

柚鈴の次に喧嘩強く、容姿端麗

柚鈴の専属執事であり彼氏でもある。

泣いてるのが紫苑柚鈴シオンユズ
紫苑財閥の一人娘。

喧嘩最強、容姿端麗、マイペース。

「ご飯焦げちゃうから待っててね」

「零夜・・・」

「ふふっおいで」

零夜は柔らかく微笑んで手を繋いだ。
この部屋を出ると良い匂いがしてきた・・・

「・・・オムライス」

「うん。好きでしょ」

「大好きっ」

零夜のオムライス久し振りだな・・・
楽しみっ・・・

「柚鈴、熱いから気を付けてね」

「はあい」

卵がふわふわトロトロでおいしいっ！！

「おいしい！！零夜天才っ」

全部食べ終わってソファでゴロゴロしてた。

「ありがとう。あ、柚鈴・・・」

「んっ・・・」

見上げると唇を舐められた。

「さ、お風呂入ろう」

お風呂・・・どんなのかなあ

「何やってるの？柚鈴おいで」

え？柚鈴も？

「一緒に入るの？」

「当たり前でしょ」

ええ．．．恥ずかしいよ！！
裸になるって事でしょ？

「柚鈴一人で入るっ」

「だーめ」

だって高校生だよ？
なのに男の人と一緒に入るの？！

「ヤダもん！！」

「強制連行」

ズルズルとお風呂まで連れてかれた。

「脱いで」

「嫌」

脱衣所でこのやり取りがもう5分程。
だって彼氏の前で脱げだよ？
無理でしょ！！

「！！！？」

「いい子だから大人しくしててね」

どこぞの脅迫する人の様なセリフを言っ
てワンピースに手をかけられた。

「や！！！」

「暴れないで」

「あんツ・・・」

胸の先端を弄られて力が抜けた・・・
暴れる度にいろいろされて結局全部
脱がされた・・・

「柚鈴、濡れてるよ?」

「違う……」

髪を洗われて次は体。

零夜が普通に洗ってくれるわけない。

「ッ……あ、んっ……」

スポンジを使って先端を擦ってくる。

「体、洗ってるだけなのに感じてるね」

甘い声で囁いてくるからもう大変……

「ねえ濡れてるよ?中も洗わないとね」

「んあ……や……は、う」

指が進入して蕾を刺激する。

ビクンッ

「ああッー．．．!!」

シャワーをソコにあてられてイッた。

「ちょっとイジメ過ぎたかな」

クタツと零夜にもたれ掛かる柚鈴をみて
楽しそうに笑った。

「ごめんね、柚鈴」

もう柚鈴に意識はないからちゃんと体を
洗ってお風呂をでた。

え、そんなのあり？

「やだ．．．．」

「ごめんね、後は先生と行ってね」

「零夜あつ．．．」

「いい子にしてたらご褒美あげるよ」

だんだん遠くなってく背中をジッと見ていると

「君が柚鈴ちゃんだね。さ、入ろうか」

ゾクッ

「気持ち悪．．．」ボソッ

耳元で話すハゲに寒気がした。

「柚鈴ちゃん自己紹介して」

「紫苑柚鈴」

キモイ．．．柚鈴が着てるの膝位の半ズボンに
上は薄い長袖のシャツなのに．．．
ズボンの上から内腿触ってくる．．．

「席はあそこだね」

パツとハゲから離れて窓際の席に座った。
ハゲが教室から出ていくと囲まれた。

「彼氏いる?!」

「ちょっと抜け駆けしないでよ!!」

「俺と付き合わない？」

「どっから来たの？」

男女両方。

「てか女の子だね?なんでズボンなの?」

「まずそれ制服じゃなくね？」

まあ一応女だしこれも制服じゃない。

「柚鈴はスカート着ない。

でもここの男子用の制服も嫌」

「声可愛いー!!」

「ちょ、俺やば・・・」

なんなの？それより普通さ、女子って・・・
転入生をイジめるんじゃないの？

「あの・・・ゆ、柚鈴様と呼ばせてください!!」

はい？大丈夫？この子・・・
・・・いや、この子達。

「なんで・・・？」

「お、覚えてませんか？？」

私．．朝あなたに助けてもらっただんです」

．．．．．朝？あ、そういえばそんな事も．．．

「ああ．．大丈夫だった？

あんなのに引っかけちゃ駄目だよ」

数人の男に囲まれてた子。

「は、はい！！」

いい返事に少し微笑むと真っ赤に．．．

「え．．．どうし」「柚鈴様！！」「」

「私達（俺達）も呼ばせてください！！」

．．いいクラスなんだろうけど疲れる。

「勝手にして．．．」

なんか疲れた。すっごい疲れた。
あのハゲの事もあったし．．

「．．．．帰る」

「「「お見送ります！」「」」

なんで聞こえてんの．．？

「いや．．．電話するから」

そんなシュンとしないでよ；

「零夜．．．．」

《もう終わったの？》

「まだ．．．でも帰る」

《駄目だよ》

「じゃあいい．．．」

《え？柚鈴．．．プチッ

今になってハゲに触られた感覚が戻ってきた・・・
気持ち悪い、気持ち悪い・・・

「・・・っ・・・」

急ぎ足で教室をでた。

「・・・はあっ・・・う・・・」

苦しい・・・息が出来ない・・・

「れ・・・い・・・や・・・」

なんとか保健室に辿り着いてベッドに
倒れた。

苦しくて意識が遠のいていった・・・

――――

零夜 side

《零夜．．．．》

「もう終わったの？」

《まだ．．．でも帰る》

「駄目だよ」

《じゃあいい．．．》

「え？柚鈴．．．ツーツー

どうしたんだ？

なんか．．．嫌な予感がする。

柚鈴がいるのがA棟で授業のする教室がある。
俺がいるのがC棟で病院みたいなもの。

「迎えに行きますか」

仕事を中断してA棟へむかった。

――――．．．．．

ガラ

「柚鈴．．．．？」

いない、教室に．．．

「紫苑柚鈴どこ行っただか知ってますか？」

「ゆ、柚鈴様は帰るって言っていました」

柚鈴様．．．？なんか変な事になってる。

．．．帰るって言っても俺がキー持つてるから
帰れないはず．．．．

「あの．．．柚鈴様苦しそうでした」

「苦しそう？」

なんか、あつたな。

「はい．．．息が不安定でした。
だから．．．」

保健室にいます。それを聞いたら

走りだした。

「！！・・・柚鈴っ」

「ッ・・・やめ・・・」

保健室に入ると苦しそうに顔を歪めてる柚鈴。
寝てるみたいだけど・・・泣いてる？

「柚鈴！！」

「れ・・・や・・・？」

うつすらと開いたエメラルドグリーンの瞳に
涙が滲んでる。

「零夜っ！！ふえ・・・っ・・・う・・・」

なんか最近よく泣くなあ・・・
可愛いからいいんだけどね。

「よしよし・・・どうしたの？」

思わず優しい声がでたりね・・・

「……………」

俺に言えない様な事、ね。
まあ言ってもらっけど。

「言ってくれないとまた怖い思いするよ?」

多分、この学校で起きた事。

「…………あのね」

—————
柚鈴side

「…………先生がっ触ってきて…………
気持ち悪かった…………」

「先生…………?」

声．．．低くなつた？

「その先生って誰？」

「ハゲの担任．．．」

「そっか。怖かったね」

「．．．んツ．．ふあ、．．やは」

しまった．．．ここ、保健室．．．！！

「れえや．．．部屋帰ろ？」

「．．．．今とめるの？」

ベッドに倒されて服に手かけられてる。

「．．．もう暗いから帰りたい」

「わかりましたよ、お嬢様」

ちよつと拗ねちゃった．．．？
でも眠い．．．

「ごめんね？」

「今度は覚悟しておいてね」

そう言つて眩しい笑顔を見せた零夜が・・・
少し、いろんな意味で怖かった・・・

「帰ろうか」

「ん・・・」

やっぱりダメダメだ・・・

「・・・だめ？」

「まだ仕事残ってるんだ・・・」

「・・・。」

仕事・・・あるんじゃない駄目だね・・・

「柚鈴30分くらい待てる？」

「待つ」

・・・ん？零夜の敬語とかどうなったか？
母さんや父さんがいる時だけ。
ここは寮だからいない。

「ココア飲む？」

「・・・自分でやる」

仕事、早く終わらせてほしい・・・

「危ないよ」

終わらせないと一緒に寝れない・・・

「・・・いいから仕事して」

「わかったよ」

・・・ココアってどうやるんだっけ。

えっと・・・粉だから温めた牛乳をいれるだけ。

「簡単じゃん・・・」

牛乳を計って火にかけた。

「ふあゝ・・・」

眠い・・・でも怖い。

「も、いつか」

コップに粉をいれて牛乳をいれる。

ガチャンッ

「熱ッ．．．!!」

「柚鈴!?!」

鍋、落としちゃった．．．

「冷やさないと!!」

結局零夜の邪魔しちゃってるし．．．
ほんと、なんも出来ないな．．．

「大丈夫だから零夜し「駄目!!」」

水を当てられたところがヒリヒリする。

「邪魔．．．だよな」

自分のワガママで待ってるのに、
邪魔しちゃうとか．．．ありえないよね。

「仕事はもういいから寝よう?」

たぶん、ここで寝ると零夜は明日早く
起きて仕事を片付けるつもり。

「．．．一人で寝る」

平気、数分で寝れる。
少し我慢すればいいだけ．．．

「怖いんですよ」

「怖くない．．．」

柚鈴の部屋に入ってベッドに潜った。

「．．．っ．．．．．」

怖くない、怖くない怖くない・・・
袖鈴がこんな事で怖がってたら“あいつら”
に笑われる。

「こんなに震えちゃって・・・嘘は駄目でしょ？」

あんなハゲに触られただけでこんなに
なるなんて・・・やっぱ女なんだ・・・

「先生にどこ触られたの？」

「だいじょつ・・・んツ・・・あ・・・」

「嘘つくの？ 躑し直さないかね」

今日はやらないって言ったのに・・・

「どー？」

「・・・や・・・ッんあ・・・うち、も・・・も・・・」

正直に言うつと体を触ってた手が止まった。

「内腿？・・・ここは触られてない？」

「ひぁッ・・・！！内腿、だ・・・けっ・・・」

もう濡れてる秘部に零夜が指をいれた。

「袖鈴、明日からは安心して学校行けるよ」

そんな事言つまえにこの状態どうにかして

「眠いんでしょう？一緒にいるから寝て」

「仕事・・・」

「もう終わったから。ね？」

その声を聞いて零夜の腕の中で眠った。

離れないで、お願い。

「んー．．．れ、や．．．？」

「おはよう、柚鈴」

朦朧とする意識の中で声がきこえた。

「．．．もちよつと．．．．．」

「だめ。遅刻するよ」

でも、学校に行く＝零夜と離れるっていう
方程式ができる。

だからまだ離れたくない．．．

「やだっ．．．零夜といたいのがっ!!」

またあのハゲと会うのは嫌だ。

「っ．．．あんまり可愛い事言わないで」

抱き寄せられて零夜の顔見えないけど
耳が赤い．．．

「．．．朝食、柚鈴になっちゃっよ?」

びくっ

「．．．いいもん」

ハゲに触られるよりずっといい。

「．．．早く着替えて」

体を離されて見上げると呆れてる。
でも、嫌だ。

「．．．やだ」

「はあ．．．好きにして」

え．．．．．。

やだ、行かないで．．．っ

「れーやつ．．．」

呼んでも振り向いてくれない．．．

「．．．．．う．．．っ
「．．

泣きながら学校の準備をする。

ガチャ

「．．．れい、や．．．．？」

いない。リビングにもいない。
おいてかれたの？

「ふえ．．．っ．．．う．．．
「．

「どーしたの？」

A棟まで歩いて、あんまり気なさそうな
中庭でしゃがんで泣いていた。

「あ。キミ、柚鈴“様”でしょ？」

零夜じゃない．．．誰、この人。
はちみつ色のふわふわした髪に青っぱい瞳。
可愛い、男の子．．．

「俺、同じクラスの九僑唯。
唯って呼んでね柚鈴ちゃん」

ここ気持ち良いよね、なんていいながら
隣に寝転ぶ唯。

「ねえ、どうして泣いてたの？」

「．．．．．。」

今知りあったばかりの人に話すわけないでしょ。
それよりも零夜が来てくれない。
いつも、昔から泣いてる時は側にいたのに。

今は、いない。

「話したら楽になれるかもよ？」

「……………うるさい」

今日はもう授業受ける気分になれない。
立ち上がって携帯をだした。

《もしもし！！柚鈴からかけてくれるなんて
パパ感激！！》

相手は、父さん。

「……………なんか仕事頂戴」

《…………柚鈴、なにがあつたか知らんが
感情まかせに殺ればお前が殺られるぞ》

“仕事”このキーワードがでた瞬間真面目な
声色になるこの馬鹿親。

「暇だからやるだけ」

授業にでる気はさらさらないけど何かしてないと泣きそう。

《．．．宮沢組、薬を売ってる所だ。

柚鈴一人でも十分だが念のために

零夜を連れてくといひ》

宮沢組．．．一人でも10分もかからないね。

「．．．了解」

歩きながら電話してたからもう寮の前。
部屋．．．に来たけど、鍵は零夜．．．
入れないじゃん。

「っ．．．．．」

会いたい、でも怒ってる。

「服、買おう．．．」

どっかで黒い服買って宮沢組行こう。
たしか敷地内に服屋っぽいのがあったよね。

「・・・これでいいか」

下はスウェットに上はフード付の黒パーカー
を買って宮沢組に向かった。

「こんなもんかな」

途中、公園のトイレで買ったものに替えて
“黒猫”になる。

宮沢組がいるからこの辺は昼間でも静かで
人通りもほとんどない。
だから人の目に付かずに宮沢組に行ける。

「誰だてめえ」

宮沢組の門を開けると図体のデカイ男2人。

「組長だせ」

黒猫の時は男としてやってる。

「何の用だ!!」

「宮沢組を潰しに来た」

さっさと終わらせよう。

男が殴りかかってきたのを受け止めて
鳩尾を殴り気絶させる。

「なめんじゃねえ!!」

おっそい・・・ほんとに組員？

「つぐあ・・・」

軽く蹴っただけなんだけど。
弱いなあ・・・

「侵入者だ!! 殺れ!!」

一気に集まってきた蔵ついで男共。
気持ち悪いなあ、目イッちゃってるし。

「暑苦しい……」

ほんと数だけだね、こいつら。
倒れてる組員を横目に組長の所に……
行くまでもなかったね。

「なッ……なんだこの有様は!!!!!!」

直々に出てきてくれたよ、組長さん。

「……!!黒猫」

そんな有名だったかな。

「薬やってるらしいな」

ゆっくり歩み寄る。

「ヒッ．．ゆ、許してくれ!!」

銃を向けると怯えだし、座りこんだ。

銃で怯えるなんて．．．よく組長やってれたね。

「さよなら」

パンツ

組員と同じように倒れた。

「10分かってないし．．」

またトイレで着替えて学校に帰る途中
呟いた。

「柚鈴」

「．．．!!?」

なんで．．．．．

「どこ行つてたの」

学園の門に寄りかかつてる零夜。

「柚鈴、おいで」

躊躇しながらも近付くと腕を引つ張られ、
零夜の胸にダイブ。

「・・・泣いたの？」

目、赤いよと言いながら瞼にキスを落としてく。

「宮沢組、一人で行つたでしょ」

「・・・だつて零夜怒つてたもん」

そう言つて見上げると困つた様に笑つた。

「怒つてないよ。ただ・・・」

一度言葉を止まり視線があう。

「柚鈴が可愛くて止まらなくなりそうだった」

顔に熱という熱が全部集まるかんじで、
絶対いま顔真っ赤！！

「柚鈴いなくて旦那様に連絡したら
宮沢組潰しに行ったっていうから・・・」

「・・・ごめんなさい」

心配かけちゃった・・・
また、ワガママな行動で。

「ふふ、なんで泣いてたのか教えてくれたら
許してあげる」

なんか、もう・・・主従の関係崩れてる。
従者のはずの人に許してあげるって・・・

それに理由なんて恥ずかしくて言えない！！

「・・・いや」

「許さなくていいの？」

「・・・っ零夜が！！離れてっちゃうと思ったのっ」

また真っ赤になりながら言葉を発した。

「よくできました。いい子だね」

たいして歳変わらないし！！

「もう離れないで・・・？」

「ふふっわかってるよ」

え、あ．．．う．．．って意地悪．．

「それと．．．柚鈴、あの教師もういないよ」

「ほえ？」

「俺の柚鈴に触ったんだから．．．それなりに」

「ツんん．．．．．ふ．．．っ．．．あ」

ここ裏庭っ．．．誰か来ちゃうかも．．！！

「や．．．っれい．．んツ．．．」

「俺はここでもいいんだけど柚鈴が、ね」

キスでもう足がガクガクする．．．

「ふふっ、立てないの？可愛い」

耳元で囁かれるだけで甘い声に体が反応する。

「零夜・・・」

「ん？」

横抱きして私の頬にキスをすると
歩きはじめた。

ぼーっと零夜の顔を眺めると、

「・・・柚鈴？」

「え？」

「手・・・どうかした？」

「あ・・・んーん何でもない」

無意識に零夜の顔に手を伸ばしてた。

「危ないからちゃんと首に回して」

「・・・うん」

―――――
―零夜が満足（笑）した後

「んー．．．ふあ．．．」

「柚鈴、立てる？」

うー．．．ねむい．．．

「うあゝー．．．いたあい．．．」

無理、立てない。
腰痛い！！

「ごめんね。柚鈴が可愛かったから．．．」
「なっ．．．！！」

ひょいっと横抱きしながら笑った。

「どこ行くの？」

「今日の夕飯講堂でいい？」

「うんっ」

ざわっ・・・・・・・・

「あの人カッコいいー・・・」

「抱かれてる子誰??」

「あの子可愛いくな?」

むう・・・・・・・・柚鈴の零夜なのに・・・

「目立ってるね」

あれ、なんか零夜不機嫌?

「れーや?はやく座ろ?」

不機嫌な時は余計な事に触れない触れない・・・

「ん、奥の席行くね」

ちゅっ

．．．え！？皆見てたよね？

「馬鹿零夜．．．」

「ふふ、柚鈴を変な目で見てる奴らが
いるからね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378u/>

White

2011年9月3日14時39分発行